

キリストの香りを放つ (第2コリント 2:12-17)

2020年5月17日 (日)

ジョーイ・ゾリーナ牧師

今日も第2コリント2章12節-17節からのシリーズを続けます。皆さんに質問です。

あなたはキリストの香りがしますか？

「一体どういう意味だ？」と思われたかもしれません。

パウロとコリントの教会との複雑な関係の中で、「クリスチャンの香り」とは何か見ていきます。一緒に御言葉を聞き、3つのことを洞察します。1、他の人を気にかける時の不安、2、キリストの勝利にある勇気、3、私たちを通して神様が放つキリストのアロマ (香り)

1.他の人を気にかける時の不安

12~13節

「12わたしは、キリストの福音を伝えるためにトロアスに行ったとき、主によってわたしのために門が開かれていましたが、13兄弟テトスに会えなかったので、不安の心を抱いたまま人々に別れを告げて、マケドニア州に出発しました。」

さあ、パウロはテトスと一緒に、良い反応を示したコリントの教会に手紙を送りました。パウロはマケドニアに行く途中に、アジアにあるエペソからコリントまで行こうとしていました。エペソではパウロは信仰のために非常に激しい苦しみにあいました。(一章参照)そしてエペソからトロアス(ここもアジア地域)に行きましたが、そこではテトスに会えなかったのでパウロの心は悩まされました。覚えてください、テトスはコリント人についていい報告を持っていましたが、パウロはこの時点でそのことを知りません。そして、12節で「わたしは、キリストの福音を伝えるためにトロアスに行ったとき、主によってわたしのために門が開かれていました」と言っています。注意深く見てください。この「門」という言葉は描写ですね。福音を伝えるための素晴らしいミニストリーの機会の門でした。ですがパウロはなぜ主が開いて下さった門をそのまま置いてきてしまったのでしょうか。トロア

スで主が門を開いて下さったのにパウロは不従順になり去っていったのでしょうか？もう少し詳しく見てみましょう。

パウロは「主によってわたしのために門が開かれていました」と言っていますね。この門は自分勝手な野心を追求するための機会の扉ではありませんでした。この門は神様が福音のために開いて下さったものです。つまり、人々は福音に心を向けたということです。ここで改めて見えることは、救いは神によって始まるということです。人々の心に福音が届くために神様が扉をお開けになります。クリスチャンとして、この街に開いている門を探していますか？周りを見ていますか？周りに目を向ける時、神様が開いて下さった門が見えますか？もしくはあなたの心は教会外の人には閉ざした状態ですか？開かれた扉に福音が入っていくことを嬉しく思いますか？周りの人に仕えるための機会のために祈っていますか？

神様はパウロのためにトロアスで門を開いてくださったのです。パウロはこの機会を逃しませんでした。どうして分かるのでしょうか、使徒の働き20章6-12節では、パウロのマケドニアとコリントからトロアスへの帰路途中に、もうすでに教会がありました。つまり、パウロはすでにトロアスで福音を宣べ伝えたのです。教会が建てあげられるまで長くは滞在できませんでしたが。「主によって私のために門が開かれた」とパウロが言ったのは、別の言い方をすると、パウロが帰ってくるまで、門は開き続けた。ということです。神様が門を開く時、サタンですらそれを閉ざすことはできません。他では、パウロがエペソの地でミニストリーに成功したことを話す時、似たような言い方をしています。「わたしの働きのために大きな門が開かれている・・・」（第一コリント16：9）また、使徒の働き14：7では、パウロとバルナバが、最初の宣教の旅からアンテオケに帰る時、「異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。」とあり、コロサイ4章3節では、「同時にわたしたちのためにも祈ってください。神が御言葉のために門を開いてくださり・・・」とあります。

さて、パウロはこの開門のために祈ってきましたが、13節で「兄弟テトスに会えなかったので、不安の心を抱いたまま人々に別れを告げて、マケドニア州に出発しました。」と述べています。コリントの教会にある様々な問題を抱え、パウロの心には重荷がありました。苦悩していました。トロアスでテトスに会いたかったので、平安を得られませんでした。テトスを通して、コリントの教会がどうしている

か聞くことをとても楽しみにしていました。その重荷の心とともに、人々に別れを告げて、テトスを見つけるため、マケドニアに出発したのです。

ここで何が起きたか分かりますでしょうか？パウロはコリントの問題のことを気にかけてため、トロアスでの滞在時間を短くしたのです。驚くべきことですね。これは犠牲が伴うリーダーシップです。パウロは「兄弟テトスに会えなかったので、不安の心を抱いた」言っています。「安らぎの心」がなかったのです。コリントの問題のことを非常に気に向け、重荷とし、主が開いてくださった門に集中できませんでした。

他の人の健康・幸福状態を心から気に向け、思いやると、時に深く悩まされます。これは犠牲の愛と呼びます。多くの親は毎日きつい仕事をこなし、家庭での子どもの問題を気かけます。ですが、パウロがここで経験しているようなことは経験していません。ですから、パウロは11章28節で「このほかにもまだあるが、その上に、日々わたしに迫るやっかい事、あらゆる教会についての心配事があります。」と追記しています。マケドニアにやっと到着した時も「不安」が続きました。7章5節で「マケドニア州に着いたとき、わたしたちの身には全く安らぎがなく、ことごとく苦しんでいました。外には戦い、内には恐れがあったのです。」とパウロは言っています。パウロはマケドニアで気落ちもしていたのです！（7章6節）彼の権威は偽使徒たちに揺るがされ、彼の高潔さも疑われ、またコリントでの多くの問題は言うまでもありません。そのような混乱と安らぎが無い中で、パウロはどこで慰めと勇気を見つけたのでしょうか。彼はキリストの十字架の勝利に見つけたのです。では、次のポイントを見ましょう。

2.キリストの勝利にある勇気

「14 神に感謝します。神は、わたしたちをいつもキリストの勝利の行進に連らせ、わたしたちを通じて至るところに、キリストを知るとい知識の香りを漂わせてくださいます。」

気づいてください。パウロの感謝はコリントのために心配している真っ只中にありました。パウロは言います。「私たちをいつもキリストの勝利の行進に連らせてくれる神に感謝します。」勝利の行進とは何でしょう？ここでのイメージは、ロー

マ帝国将軍が4頭の馬に引っ張られている戦車の図です。パウロの時代では、ローマの勝利の行列は、敗北した敵に行進させる壮大な儀式でした。しかし、パウロはこの勝利の行進の中でどのように自分を見たのでしょうか？

ローマ帝国が敵を打ち負かした時、その敵たちを、行進の最後に彼らの神々へのいけにえとして死に負いやっていました。だから、パウロの頭の中には、十字架の上で勝利を治めたキリストが、私たちが勝利の行進へと導く偉大な勝利者だという考えがありました。この、「勝利の行進」という言葉は、新約聖書の中ではこの2コリント2章14節と、もう一箇所だけ、コロサイ2章15節に書かれています。そこでパウロは、キリストを、霊的勢力及び支配者の最大の勝利者として見なし、そしてキリストはそれらを公然とさらしものにしました。そしてパウロは、自分自身を、「イエスキリストの囚人」と呼んでいます。パウロはその言葉をエペソ3:1、ピレモン1:1でも使っています。パウロは自分を、自分のエゴを捨てるように導かれ、プライドを捨てるように導かれ、毎日、自分の義を捨てるように導かれる、「キリストの囚人」と見ました。パウロはキリストを、罪、死、悪、悪魔を打ち砕いた最大の勝利者として見ました。そして自分自身は、罪、誘惑、恥、弱さを通しての苦しみから勝利することを導かれた者として見ていました。この勝利の行進は、パウロがここで苦しみを通して勝利に導かれたから、勝利的なものではない、ということではありませんよね？パウロは自分自身を、自分の弱さの中でキリストの十字架の勝利に加わっていると考えています。

だから、パウロがアジア州で死にかけていた1章9節でさえ、彼は「わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。」と言っています。それで、いつも福音のために苦しんでいたパウロは、勇気を見つけられる勝利のキリストに注目しています。彼は自分を、敵を打ち負かした偉大な司令官の戦車の後ろを行進するキリストの兵士だと思っています。ここでパウロは十字架の上のキリストの勝利に感謝しています。パウロの感謝は、いつも勝利の行進に連ならせてくれるキリストにあるのです。なぜなら、キリスト教では、死の後に復活があります。だから、パウロはいつも、苦しみの中でさえも、神の人々を勝利の行進に導いてくださる神に感謝しているのです。

Q.質問です。あなたは人生がうまくいっている時だけ感謝していますか？あなたは仕事やお金や健康に何の問題もない時だけ感謝をしていますか？いいですか、苦しみの中で神への感謝は、パラドックス（矛盾しているようで実は正しいこと）です。後の6章10節で、パウロは「悲しんでいるようで、常に喜んでいる」と書いています。クリスチャンとは、苦しみのない時だけではなく、苦しみの真っ只中で喜びを体験する人々です。それどころか、神様に捧げる感謝は苦しみの中でこそ純真

なものとなります。いいですか、多くの人々は、彼らの外面的状況がどれほど良いかにかかっていると思っています。だから、私たちの感謝は、よく、他の人よりも多く持っている、より良い状況にいるという罪悪感から動機付けられていることがあります。最終的に7章で、パウロはマセドニアにいるテトスに会います。テトスはパウロにたくさんの慰めを与えてくれました。しかし、この時点で、パウロの心配はキリストの勝利ゆえに感謝へと変わっていくのです。

いいですか、喜びへの鍵は、イエスがしてくれたことに対する感謝の応答です。実際のところ、神様から与えられたギフト（賜物）、仕事、健康、経済面、キャリア、教育を偶像化してしまうことから解放される方法は、**神さまに感謝をすること**です。それで、パウロは、いつもキリストの勝利に導いてくださる神に感謝していました。彼の言い方に再び注目してください。「神に感謝します。神は、わたしたちをいつもキリストの勝利の行進に連らせ、わたしたちを通じて至るところに、キリストを知るとい知識の香りを**漂わせてくださいます**。」パウロが言っているのは、（私たちがキリストのような苦しみの中で罪に死ぬ時）**私たちを通して**、キリストを知るとい知識の香りを広げてくださる、ということです。全てを支配しておられる支配の中で神は、パウロを通してキリストの香りを漂わせ、広げていました。では、最後のポイントです。

3. 私たちを通して神様が放つキリストのアロマ（香り）

15-17節

「15 救いの道をたどる者にとっても、滅びの道をたどる者にとっても、わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。 16 滅びる者には死から死に至らせる香りであり、救われる者には命から命に至らせる香りです。このような務めにだれがふさわしいでしょうか。 17 わたしたちは、多くの人々のように神の言葉を売り物にせず、誠実に、また神に属する者として、神の御前でキリストに結ばれて語っています。」

勝利の行進の間、多神教徒の祭司たちはローマの神々に捧げる香を焚きながら持ち運んでいました。そしてローマの勝利の行進の後、その香りは群衆の中で残り続けました。だから、ここでパウロがこう言っています。「わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。」「アロマ」とは、良い香りのことです。ギリシャ語訳旧約聖書では、旧約聖書のいけにえとして用いられていた言葉でした。（創世記8:21；出エジプト記29:18；レビ記1:9；民数記15:3）しかし、パウロは

こう言います。「わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。」十字架上のキリストの犠牲は、究極的な「神に捧げる香り」で、それは私たちの罪の赦しのために、神に受け入れられるものです。そしてパウロはフィリピの人たちが送ってくれた寛大な贈り物に同じ言葉を使っています。(フィリピ4:18) パウロはこう呼んでいます。「それは香ばしい香りであり、神が喜んで受けてくださるいけにえです。」

つまり、キリストのために苦しみ、福音を宣べ伝えているパウロの人生は、犠牲的な捧げ物であり、神がとても喜んでくださっているのです。パウロが福音を宣べ伝えている時に、喜んで拒絶、攻撃、迫害に苦しんでいるパウロの人生は、神さまにとって甘い香りのアロマなのです。パウロのコリントの人々への犠牲的な愛はイエスのようであり、神様が喜んでおられるのです。そしてローマの行進で多神教徒の祭司が香を炊く時、この香りは2つのタイプの人々にそれぞれ影響を与えました。パウロが15節で言っていることに気づいてください。「救いの道をたどる者にとっても、滅びの道をたどる者にとっても、わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。」司令官の後ろで行進をしている兵隊にとっては、人生の勝利の香りがします。しかし、打ち負かされた敵には敗北と死の香りです。これが、16節でパウロが言っていることです。「滅びる者には死から死に至らせる香りであり、救われる者には命から命に至らせる香りです。」もしあなたが、キリストにある、神様からの無償の恵みを差し出される時、拒絶するなら、それは死の香りがします。もしあなたがそのキリストにある神様の無償の恵みを受け取るなら、命の香りがします。それは、命から命に至らせる香りなのです。

もしあなたがキリスト教に新しく、このメッセージを聞いている人なら、今日、このキリストの無償の恵みをぜひ受け取っていただきたいと思います。イエスは、あなたが罪から解放され、イエスと一緒に新しい人生を生きることができるよう罪と死に打ち勝ってくださいました。あなたの人生も神様にとって良い香りとなることができますのです。それはあなたを真実の人生へと導きます。そして、あなたがクリスチャンなら、冷静にあなたに聞きたい質問があります。あなたはどんな香りを放っていますか？キリストを離れては、私たちの義は悪臭がします。それは周りの人々、部外者にとって不快なものです。では、あなたはどんな香りを身につけ、放っているのでしょうか？さて、私はご飯の時に玉ねぎを生で食べるのが好きです。しかし、妻は私が生の玉ねぎを食べた後の口臭が大嫌いです。私から玉ねぎ臭がすると、彼女のほっぺたにキスをさせてくれません。なぜなら、玉ねぎが私の口の中で強い匂いを発するからです。パウロがフィリピ3:8で律法主義を「塵あくた、ゴミ」と呼んでいることを思い出してください。それは臭い匂いがします。言い換えると、私たちは人々を遠ざけてしまうような、内面の罪や宗教的態度、自己義認から

深くきよめられる必要があるということです。私たちには、内側から溢れ出すキリストの香りが必要なのです。

あなたが毎日職場に行く時、どんな香りを放っていますか？あなたの同僚は、「私は神を信じていないけど、この人の親切さはいい香りがする。とても素敵だ。この人の優しさ、忍耐、平安、喜びを見てると、私もこの人の人生とコミュニティに関わりたいなと思う。」と言えると思いますか？ヨハネ12:3では、マリアが高価な香油をイエスの足に塗った時、「家は香油の香りであっぴいになった。」と書いてあります。そしてここでパウロは言います。「わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。」救いの道をたどる者にとっても、滅びの道をたどる者にとっても神様への良い香りです。いいですか、クリスチャンたちの態度や動機や行動によってイエスについて不正確に伝えてしまうことが原因で福音が拒絶されるべきではありません。なぜなら、それはキリストの香りではないからです。キリストの香りを放つようになるとはこういうことです。パウロのように、苦しい時に神様に感謝するのです！物事が自分の思うようにいかない時も、文句を言ったり、悪口を言うのではなく、キリストにあって喜ぶのです。これがキリストの香りです！もし罪を犯されたら、許します。憎まれても愛します。迫害されても祝福します。自分の快適さを愛するよりも他人のために犠牲的に生きます。これがキリストの香りです。パウロの人生はまるで十字架の上で苦しんだイエスのようです。

そして神様の恵みは、救われた人々に放たれている香りのようです。福音を拒絶する人々にとっては死の香りです。しかし、パウロはこの大変な責任の重荷を感じていました！だから16節で彼はこう言うのです。「このような務めにだれがふさわしいでしょうか。」パウロは自分がふさわしいと思えませんでした。だから3章5節での彼の答えはこうです。「わたしたちの資格は神から与えられたものです。」いいですか、パウロは全てにおいて神の十分な恵みに頼っていました。私たちはどうしても人間の知恵、賢さ、戦略に頼ってしまうことがあります。しかし、パウロは17節で、「わたしたちは、多くの人々のように神の言葉を売り物にせず、誠実に、また神に属する者として、神の御前でキリストに結ばれて語っています。」と言っています。

コリントで、神の御言葉から利益を得ていた偽の使徒たちは臭い匂いがしました。しかし、パウロは自分の利益のために神の御言葉を使うことは一切拒否しました。反対に、神の御前で彼は誠実に語りました。これが全てです。クリスチャンは私たちをととても大切に思ってくださっている神の御前で生き、全てのことを神の御前でするように呼ばれています。「神の御前でキリストに結ばれて語っています。」とパウロは言っています。

いいですか、私たちが、苦しみの真っ只中でさえ、神の言葉に従う時、それは神様が喜んでくださる良い香りを放っているのです。神の御言葉はその御言葉を語ることができるよう私たちに備えます。神の御言葉は神ご自身を見せてくださいます。そして私たちは言葉と行動でキリストを表していくように呼ばれています。神様は私たちを通して命の香りであるイエスを広げていきたいと思っています。「わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。」これは神様に喜んでもらえる人々になるために、私たちみんなと一緒に送る、共同の人生です。最後に、パウロはエペソ5:2で、「キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。」とっています。

だから、私たちが愛によって歩む時に、この街のあらゆる所で、神様がキリストの香りを放ってくださいますように。